

たるにたとへたるもの也。

〔諸家奥女中袖鑑〕身持たしなみやうの事

一鐵漿を付齒を染め、爪紅粉をさす事は、齒は骨の餘り、爪は肉の餘りとあり、然れば肌骨を隠す

よしにて、略中爪切たる跡のはだへをかくすために、爪べにをさすなり。

一つま化粧の事、色を深くさすべからず、餘り紅の濃くは、廣は化粧にあらず。

〔武邊嘶聞書七〕一關が原御陣の時、伊勢國津の城は、富田信濃守信高籠城ス、略中城主富田信濃守

自身本丸の大手へ出、數度鎧を合せ戰故頼切たる兵、略中討死ス、略中城中が容顏美麗成若武者、

緋威の具足に、中二段黒革にておどしたる半月打たる甲の緒を、片かまの手鎧をつ取、富田が

前へ出、鎧合、五六人手負せ、猶進て戰、富田かの若武者を不見知、若分部左京が小性かと思ふ、いか

に左馬之助あの若武者は京兆の小性かと尋る、左馬助いやみ、去り候はず、左京小性にては無之

候と云、若武者の内甲をみれば、年の頃廿四五にも成候半、化粧して鐵漿黒爪、臙脂さし候、必定女

にて候らむと云、富田はまた敵の込入けるを門外はるかに突出し、引取様にかの若武者の内甲

をみれば、略中富田北の方なり、略中此北の方は、宇喜田安心の息女とぞ聞へし。

〔毛吹草三〕山城 堅紅粉

〔諸國名物往來〕諸國名物盡

山城 紅粉

紅粉具

〔類聚名物考 調度十〕べにざら 紅藍皿 俗云紅猪口

今案、世の童物語に、紅皿かけざらといふ二人の娘の相競て歌よみしこと有、紅皿は今俗に云ふ

紅猪口なり、

〔類聚雜要抄四〕手筈一合